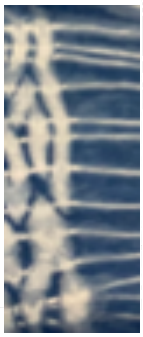
令和5年度（2023年度）くまもと県民カレッジ
「パレアオリジナル」

日時：2023年 12月8日(金)　14:00～15:30
会場：くまもと県民交流館パレア
10階　会議室７

講師：熊本市塚原歴史民俗資料館
館長　清田 純一 氏

藍染（あいぞめ）の歴史と文化



タデアイ（標本）

・イヌタデ(赤まんま)と同じタデ科の一年草。

・葉は日本の藍染の原料。しかし、100年ほど前から工業製品の合成藍に次第に取って代わられ、また第二次世界大戦中には栽培禁止とされたため、絶滅の危機に瀕したが、徳島の佐藤平助・岩田ツヤが密かに栽培を続け、種の命を今日につないだ。

・塚原歴史民俗資料館(南区城南町)では敷地内でタデアイを栽培し、種取り・育成・藍染体験教室実施などにより、日本の藍染文化を守り伝えている。
　人気の高い「藍染体験教室～藍の色は愛の色～」は今年度すでに５回開催(1月現在)。

栽 培　種まき：３月上旬～4月上旬(地域により異なる)
刈り取り：7月中旬(生葉染用)
刈り取り＋乾燥：8月中旬と下旬

ジャパンブルー

日本人に最も親しまれてきた染料は藍(アイ)。弥生時代には「山藍(トウダイグサ科)」を使った藍染がすでに行われていて、卑弥呼も藍染の絹布をまとっていたという。
　13世紀頃から「タデアイ」の栽培と染色が始まった阿波国(徳島県)では、16世紀には藍作が保護・奨励され、それまでは貴族や武士のみが身につけていた藍染が庶民の暮らしに徐々に浸透していった。

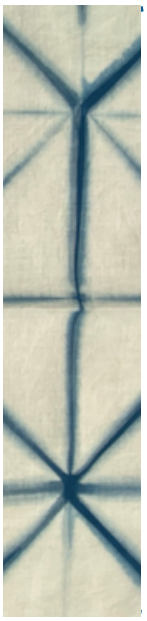
江戸時代に入ると、様々な作業着から高級衣料、美術品に至るまであらゆるものに多用され、北斎の『富嶽三十六景』で用いられているメインの色も藍色。井上伝の考案による藍染の『久留米絣』も一大産業に。
　明治初期に来日したお雇い外国人たちの目には、多くの日本人が藍色の衣服を身につけている光景は印象深く映り、彼らは「ジャパンブルー」と呼んだ。
　現在では、藍染の色は五輪のエンブレムやサムライブルーとしてスポーツのユニフォームにも用いられ、日本を代表するカラーとなっている。

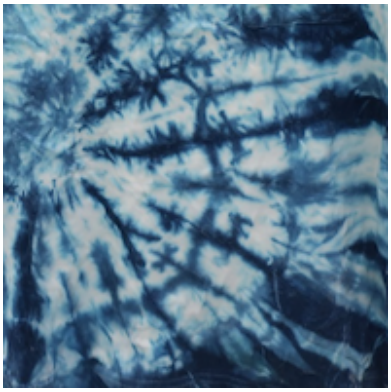
なぜ藍染？

藍染の色素(インディゴ)は防虫、防腐、消臭、抗菌、紫外線防止などの作用を持ち、利用価値がとても高い。海外でもインディゴを含む様々な植物(ウォード、インド藍など)を使った藍染の歴史は六千年も前まで遡る。ツタンカーメンのミイラの巻き布～ジーンズに至るまで、藍染はあらゆる民族の暮らしを彩ってきた。

藍染の三手法

藍(インディゴ)は非水溶性のため、草木染のように水に溶かして染色できず、手間がかかる。
①生葉染め：酢、中性洗剤を使う。
②乾燥葉染め：還元剤(炭酸カリウムとハイドロコンク)を使う。
③本染め　：10日程かけて葉を発酵させて作った「すくも」、木灰汁、石灰、日本酒を使う。





＊ 塚原歴史民俗資料館 HP： https://tsukawara.kumamoto-city-museum.jp/

パレア広報ボランティア ・くま吉(記)